

# 都市化と幼児保育の課題

津 守 真

最近における幼児の生活環境の変化は著しい。都市に人口が集中し、都市の生活様式がますます顕著になってゆき、そこで育つ幼児は、いまままでに人が経験しなかったような環境の中におかれているのである。

都市の生活環境は、どのような点でいままでと異なっているであろうか。第一には自然からの隔離である。高層住宅の三階、四階に住む幼児の生活は、土からも、緑からも遠い生活である。家においては、土とゆっくり親しむ機会もなく、木の葉や、木の実、花などを遊びに使う経験もなく、幼児期を過す子どもたちが増えつつあるのが現状である。このような子どもたちは、たまたま土にふれ植物に接する機会を与えられても、どうして遊んでよいのかかわらない。木が裸になるほどに葉をむしりとり、土をはね飛ばして他の子どもにひっかけることしかできない。たまたまふれたこのような経験に対して与えられるものは、禁止である。子ど

もたちはますます自然から離れていってしまう。

第二には空間の狭さである。都市の密集する住宅では、狭い空間ができるだけ能率よく使われるので、無駄な空間がない。すなわち、どここの隅にいたるまでも、おとなが能率よく使うように、こまかく気が配られていて、子どもが逃げこむ場所がない。常におとなの眼が正面からとどくところにおかれている。子どもは家の中で走りまわることができない。また、何をしても、すぐにおとなの眼につくから、常におとながどう思うかを気にして行動しなければならぬ。成長期において、自分が思うようにためし、工夫する生活がなかったならば、十分に精神的発達をとげることができぬであろうか。

以上は主として物理的環境に関することであるが、第三には、在来の文化的伝統からの隔離ということがあげられねばならないであろう。都市の生活は必然的に親と子のみの核家族の形態をす

すめ、また、隣近所の交際を少なくしている。そのことは、それだけの家庭の個性を伸ばすにも役立つが、実際には父母ともに家庭外のことに忙しく、子どもの生活はむしろ無味乾燥で単調なものになりがちである。休日はふえても、親子がともに楽しみにして待つような行事は減少しつつあるといつてよいであろう。

ほかにまだまださまざまな都市化に伴う生活の変化をあげることができようであろう。

幼児教育の必要が多くの人びとに感じられるようになってきた大きな理由の一つは、このような都市化が著しく進みつつあることであろう。幼児はもはや狭い家の中では精力をためあまし、親もまた、家庭環境が幼児にとつてかならずしも最適でないということを感じている。幼児の発達にふさわしい場を、家庭の外で補わねばならなくなってきているのである。

それでは、幼稚園はこのような現代の必要に応じるような保育の努力をしているであろうか。

第一の自然との隔離の点を考えてみよう。都市の幼稚園は、都市の家庭と同様に自然物に恵まれない。しかし、現在のところ、幼稚園はある程度の広さの園庭をもたねばならないことになっている。自然物の中で子どもの成長に最もたいせつなものは、土と砂（太陽と空気はもちろんであるが）であろう。園庭で、砂や土と十分に親しむことができるような体制ができていようであろう

か。十分な広さの砂場があるであろうか。砂は水を伴わねば利用価値は半減するのであるが、水は十分に使用できるようになっているであろうか。戸外で十分に遊ぶだけの時間がとつてあるだろうか。

第二に空間の点を考えてみよう。都市の幼稚園は、必然的に空間も狭くなるのが普通である。それならば、人数を調整することが必要であると思う。一クラス四十人の設置基準はどう考えても多すぎる人数である。人数が少なくなればもう少しゆとりをもつて空間を使用することができようであろう。もう一つは空間の用い方であろう。多くの幼稚園で、園庭に子どもが全く出ていない時間と、思うように動く余地もないほどに子どもが全員出ている時間との差がはなはだしすぎる。たえず半分くらいの子どもは戸外で遊び、半分くらいは室内で遊ぶようになっていけば、もっと空間をよく使うことができるであろう。クラスの全員が同時に同じ活動をしていなければ教育していかないような観念からもっと解放される必要がある。

都市の幼稚園はことに、幼児の発達にふさわしい生活を、幼児のために確保する使命をもっていると思う。それでなければ、人間らしい人間が減んでゆくのではないかというおそれをすら感じるのである。都市の幼稚園は思い切つて、幼児中心の生活を作り上げる必要があるのである。